

3

偽ガレノス『諸器官の裨益について』：
アラビア語文献との比較から

矢口 直英

東京大学大学院人文社会系研究科

ガレノス (Galenus, 216/7年頃没) は多数の医学書を執筆した。その内容は医学の分野に限らず、哲学や論理学にまで多岐にわたる。医学に関しても、生理学、治療学、疾患学、徴候学、解剖学など広く様々な著作がある。解剖学的記述を含む著作の中でも特に重要なのは、『身体諸器官の用途について』(De usu partium) や『解剖の手法について』(De anatomicis administrationibus) である。ガレノスの著作は古代末期の医学者たちを介して後世の中東へ伝わり、主にネストリウス派キリスト教徒を中心とする翻訳者たちによって翻訳されて、イスラーム世界で読まれるようになった。前述の両著作もこれらのうちに含まれており、9世紀にフナイン・ブン・イスハーク (Hunayn ibn Ishāq, 873年没) およびフバイシュ・ブン・ハサン (Hubaysh ibn al-Hasan, 9世紀に活躍) によってアラビア語に翻訳された。古代末期アレクサンドリアにおいて必修書とされた骨、筋肉、神経、静脈、動脈をそれぞれ扱う「初心者のため」の各種解剖学小篇と共に、これらはイスラーム世界における医学書の解剖学の基礎を築いた。

これらの解剖学書はラテン語にも翻訳され、中世ヨーロッパでも普及した。しかし、『身体諸器官の用途について』は確かにアラビア語版からのラテン語訳も作成されたが、それは不完全なものであったため、1317年にニコロ・ダ・レッジョ (Niccolò da Reggio, 1350年没) によってギリシア語版の写本からラテン語訳が完成されるまで完全な形で知られることはなかった。その代わりに、この文献の要約に当たる『諸器官の裨益について』(De juvamentis membrorum) が広く参照された。『諸器官の裨益について』は『身体諸器官の用途について』の内容を、ガレノスの冗長な先人批判や創造主の讃美などの記述を削除するなどして簡略化したものであり、『身体諸器官の用途について』全17巻のうち第1巻から第12巻までの記述が改編されていると言われる。ガレノスの著作の全体を網羅しているわけではないが、彼の見解を容易に知ることができるため、『身体諸器官の用途について』自体よりも好まれ、原典が翻訳された後もそれと併せて利用され続けた。その文章にはラテン語としては意味の通らない単語や馴染みのない表現があり、アラビア語で作成された『身体諸器官の用途について』の要約から、おそらくは12世紀にラテン語に翻訳されたと考えられている。

『諸器官の裨益について』のテキストはフレンチ (French R. K. *De Juvamentis Membrorum and the Reception of Galenic Physiological Anatomy. Isis.* 1979; 70, 96–109) によって簡単に検討されているが、その元となったアラビア語版を想定しての詳細な比較は行われていない。本発表では、この『諸器官の裨益について』を『身体諸器官の用途について』アラビア語訳や、アラビア語で執筆された医学文献と比較して、その成立過程に光を当てると共に、その特徴を明らかにしていく。